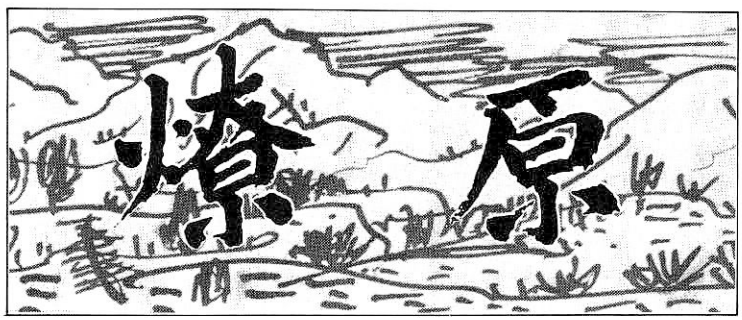

発行所
燎原社
〒606　京都市左京区
東竹屋町・川端東入る
部落問題研究所内
電話　京都761－2141番
振替口座京都　15762番
発行人
木村　京太郎
頒価　1部　200円
年　2,000円(〒共)

狙われている憲法第九条

コンピューターとばけつ・ぞうきん

この三月八日以来、敦賀原発の放射能洩れ事故が、新聞・週間誌などで大きくとり上げられている。

一つは、最新技術の粋をこらした原発は安全であるとの神話がくずれたこと。二つは、三回にわたる冷却水や、汚染廃液が一般排水路や海に流れこみ、住民の生命を脅かす大事故にも拘らず、原発幹部は、報告義務を無視し、事故かくしに汲々としてきたこと、三つは監督の権限と責任を持ち、何回も専門調査団を送ってきた通産省が、安全施設の欠陥を一回も公表したことがないことなどである。

しかし、私が一番憤慨にたえないのは、原発幹部の現場労働者に対する非人間的な取扱いである。儲けのためなら、最高の技術や施設を駆使して生産拡大をやるが、不利なときには、住民や現場労働者の生命安全はそっちのけで原発安全の神話を守るために事故かくしに狂奔する。

金にあかしてつくられたコンピューターシステムの中で、廃棄物処理場の廊下に洩れた危険な高濃度の放射能廃液を下請けの労務者にバケツで汲み、ぞうきんで拭きとらせる。戦争末期、ソ満国境で、兵隊にソ連の戦車に体当りさせ、生還を期さぬ特攻隊を出動させながら、将軍連はいち早く内地に逃れて生きている。まさに、昔も今も変らない「一将功成って万骨枯る」である。

安保廃棄　米原潜のあて逃げ許すな!!

この四月二八日は安保条約締結二九年目、折から米原潜のあて逃げ事件も重なって、全国各地で活発な抗議集会、街頭デモ、要求交渉が盛んに行れた。

今回の事件は「移動核基地」というべき米潜艦が、日本近海をわがもの顔で対ソ演習をやっていて危険な動きをかくすために、「日昇丸の遭難を確認しなかった」とか「重大な損傷はなく沈没の危険はないと確認した」と平気でウソをつくアメリカの軍機保護を最優先させている安保条約の危険性をいっそう明らかにされた。さらに怒りを禁じ得ないのは、これに対し日本政府と自民党の態度である。アメリカのウソの中間報告に対していち早く「努力を多とする」との鈴木首相談を発表し、政治的結着に持ち込もうとしている。政府や自民党にとっては、乗組員の生命、非核三原則、憲法の建前よりも、アメリカとの同盟関係が優先する。この制度的保障が日米安保条約である。日本国民はこのために核戦争にまきこまれる危険をいっそう強められた。われわれはあて逃げ事件の徹底的追究の中で、安保条約の危険性を粘り強く暴露せねばならない。

狙われている憲法第九条

五月三日の憲法記念日も、この危機感を反映して、「徴兵制、日米軍事同盟強化反対、憲法改悪阻止」のスローガンの下に、例年にない規模と熱意の全国統一行動が展開された。しかし、この同じ日に、名古屋市で、自民党、保守的知識人、右翼団体の勢揃いで、「自主憲法制定全国会議」が開催され、憲法の改悪を堂々と国民に呼びかけた。自民党の大野国民運動本部長は、この席上で「この一年間自民党の躍進によって憲法をめぐる情勢は大きく変った。これからの自民党の国民運動の課題は憲法改正を国民の間にひろげることだ」と挨拶している。これまでの「日米共同作戦協定」や、国会での防衛論議、増税、福祉切すての中で、軍備拡張、自民党二〇〇余名の閣僚議員の靖国神社一斉参拝など、すでに憲法改正への土台づくりは進められている。

人、物、施設の徴用を含む、戦時立法の「中間報告」は、政府、自民党の攻撃の狙いが、軍国主義の最後の歯どめの憲法とくにその第九条にあることをいっそう明らかにしている。

「ソ連脅威論」「安保繁栄論」など、マスコミを通ずる世論工作も、正に花盛り、世論調査の結果もそれを示している。

これに負けたら日本は破滅の道である。歴史の証人としての私たちの発言が、今ほど大切な時はない。　(Y)

研究例会（予告）

第一五回研究例会を来る五月二三日午後一時半から　中京区竹屋町通河原町東入るの京都職員会館「かもがわ」でひらきます。

テーマ　故品角一郎氏を語る。
ゲスト　北牧孝三氏ほか
参加費　一名　三〇〇円

京都の民主運動を語る会

—第一四回定例研究会報告—

戦前の京都における無産者診療運動について

当時の活動家　杉山茂医師談

「語る会」第一四回例会は、三月十九日午后二時から五時まで、京大病院正門前の京都教育文化センター第七号室でゲストに戦前京都での無産者診療所運動で活動をされた杉山茂氏を迎え、当時の思い出を聴きました。

・例会の前に「語る会」の総会（「燎原」前号参照）が行われ、前年度の事業報告、新年度の事業計画、会計報告、役員選挙などがあり、また、当日、戦前の日本共産党指導者で京都西陣の生んだ革命家、故国領五一郎氏の墓前祭が、正午から一時まで行われ、それへの参加者も「例会」に出席されたのでせまい会場は満員、懇談会は熱気をおびていました。

また杉山先生が外ならぬ小児科医を選ばれた動機は、当時乳幼児の出生百人中十五～六名が死亡（現在は〇・七人）し、その多くは栄養失調、下痢、肺炎が死亡のトップであったこと、更にこの治療活動を通じて、前衛党への資金カンパ（これだけで懲役一～二年）が行われた。このヒューマニスティックで、勇気のいる行動に深い感銘を与えられた。（小見出しは編集部）

はじめに

ご紹介されました杉山です。今、安井病院に勤めております。これまで、開業したことはありません。また一人ひとりの子供を診療するというようなことはあまりやりたくなくて、大ぜいの人を相手にするような仕事、例えば学校保健のような仕事に主に係ってきました。

今日は、実は不用意に出席しましてどんな方が見え、どんな話をしたらよいか、きめずに参りました。

何の準備もなしに出てきましたので戦前田中でやっていた「洛北診療所」のことを中心に話をしようと思うのですが、これが大体五〇年まえのことで、昭和六年四月から始まります。

一緒に手伝ってもらいました高橋松蔵さん、患者でよく見えられた谷口善太郎さん、その他いろんな方が亡くなられて当時の洛北診療所の話のできるのは太田典礼（武夫）さんと私、朝田善之助さん、それから笹原兼造さんぐらいです。

私が洛北診療所の仕事に係わり合ったのは一年間です。時々二年と書いてありますが、あれはみんなの記憶違いで、一年が本当です。「京都民報」にでている「組織的支援なく二年で…と書いてあるが、一年の誤りで、私が書いたのではありません。

太田さんも、「二年だと思っていたが一年だったなあ……」といっていました。太田さんは「あのときはよく働いたから二年のような気がした」といっていました。

小児科医として

私は小児科医になって、今年で丁度、五〇年になります。私の小児科医としての足跡を申し上げてみたいと思います。私の小児科医としての主な仕事は昭和廿七年から同四四年まで、十七年間、京都市の桃陽学園々長をしておりました。

これは主に慢性小児病、特に小児結核、気管支ぜんそく、慢性腎炎、若干の珍らしい病気、白血病、リューマチ性の心臓病の子、登校拒否症の子だとか慢性疾患の子を、勉強をし、療養しながら、すっかり元のように治して、父兄のもとに送りかえすのです。これまで大体一、五〇〇人の子供を健康にして元にかえしました。これが、私が小児科医としての主な仕事です。その前は大阪市の技師として、学校保健をやっていました。学童の小児結核検診が大学にいたときの私の研究の主なテーマでした。

そのほか、学校給食、学校保健一般があります。役人ですから予算をとることが大きな仕事です。特に結核検診費の予算を、多くとってきました。

これは昭和十七年から始まったのですが、同廿七年までおり、その間、応召で中支に二年おりました。

応召された方はご存知と思いますが、私も栄養失調になって帰ってきました。軍隊ではコレラ、赤痢検診の検便をやっていました。

終戦後は面白かったです。長沙の田舎の無医村の診療を主にやっていました。中国人と大そう親しくなり、兵隊二～三人連れてゆきますと、食うに困っていたので、よく中国酒でもてなされて帰ってきました。大部、有卦に入り、何キロも奥地にはいってゆきました。もう一度行きたいので、その後手紙を出しましたがうまく着かないのです。

帰還してから死ぬか生きるかの大病をやりました。通算四年くらいのブランクはありますが、学校保健だとか、小児慢性病のホスピタルスクールをつくる——このようなことをやったのは、結局、医科大学生時代に学生運動というものをやったからだと思います。

医学生の頃

これは、今私の隣りにおられる旧制水戸高校出身の井垣さん——この方の同窓色川善助さん、宇都宮徳馬さん、水田三喜男さんなど、大体、京大で私と同級です。

このなかで、色川さんは特によく知っています。私たちR・S（Reading-Society）——読書会——というのをつくってお互い勉強していました。

医学部の学生はR・Sメンバーには割合少なかったのですが、それでも見つからんよう下宿、下宿でやっておったのです。十人、二十人も連れてこずに大体五—六のグループでR・Sをやっていました。

ご存知の方もあると思いますが、「無

産者政治必携」をテキストに使っていました。また、私たち医者ですから「コムニスト・マニフェスト」（共産党宣言）をドイツ語で読むとか、「ABCオヴ・コムニズム」（共産主義のABC）だとか、ああいうものを銘々が何頁か読んで、説明するとかいうことをやっていました。

あまり外部運動には出てゆくことはなかったですが、私は一件だけ関係していました。

藻谷小一郎君（四高出身）が結核で京大に入院していたとき、看護婦さんをアジり、待遇改善のストを起こしました。要求の条件は大方忘れましたが、畳を一人について何帖くれというような、相当大きな条件を要求していたのを覚えています。

医学部には、加藤虎之助という、私より二つ年上の方がいて、あとで吹田の無産者診療所の所長をやっていました。非常にしっかりした人で、無口ですが、観察力が鋭く、この人を私は兄とも思って尊敬していました。

このストのとき、加藤さんから、―お前レポをやれ―といわれ、レポのやり方を一つ一つ教えてくれるのです。

―お前は下宿を出るとき、大丈夫と思っているが、一回、ぐるっと廻ってみて、まっすぐには出かけるな。目的地にゆく場合には、角々を廻って、誰かつけていないかを確かめる―と。というようなことを教え、今でも思い出すことは、「丸、竹、夷、二、押、御池……」と、京都にきた小僧さんがまっ先に覚えさせられる、地名を、今日は丸太町、明日は竹屋町と順番にレポをやるように教えられた。

―夜、ショールをかけた女の子が向うからくる、その子とレポせよ―。女の子だというので胸がどきどきしましてね。向うから何もいってこない、それで今日は何もなかった、と、レポは一回だけです。

看護婦さんのストは、十二月の寒い日でした、それは竹屋町から始まって夷町までゆかなかったと思います。

それから、本をみると、昭和六年の一月だと書いてありますが、「新興医師連盟」の発会式というのが東京でありました。それに、加藤さんと私は一緒に、東京落合にある村山知義さんの家に行きました。村山さんの家は、面白い家で、可成り広い板の間が続き、棟木が、サッと出ていたりしていて、アトリエだとききましたが、民芸調の家なんです。そこで発会式が開かれたのです。

洛北診療所時代

ヒヨッコ医者として

次に、田中にあった洛北診療所の話に移りますが、私たちは無産者診療所のつもりでいたのです。それで京都の状勢を報告するつもりでいったのですが、京都でもそのうちできる予定だと話しました。そのとき一番よく発言されたのは松崎さんといって、府立医大を出られて、医師にはならずに、映画のプロデューサーになって「上海」とかのドキュメンタリー映画を製作された方です。青木君というのが本名です。

私は卒業試験を受けてからいったように思うのですが、金高ますえさんの本には一月と書いてあるのだそうです。昔のことだから、お互い思い違いがあることと思います。

無産者診療所の性格をもつものとして、私は心では行くことに同意していたのですが、この「京都民報」にも書いていますとおり、卒業して、ある四月の晴れた朝、まだ寝ているうちに起されたのです。

小林清一さんと羽根田兼道さんが、ドン、ドン、ドンと登ってきて、これから診療所にゆきましょうというのです。私はびっくりした。ゆく気はしていたが、まさか今日とは思っておらず、有無をいわさず、荷物をまとめて、二人とも力持ちですから、さっさと、大八車にのせ、私は電気スタンドをもって後ろからついてゆきました。

田中玄京町に着いたら「洛北診療所」と、大きな看板がでていました。

今でもその家は残っています。私はそこで一日おきの夜間診療をやるのと、当直医くらいの程度だった。これは太田さんの名儀で、私はまだ医師の免許状がとりたてで、ほんのヒヨコです。太田さんは自分の医院の他にそこへ出張所を出す権利をもっており、もう当時すでにベテランで医師会員です。

私はまだ医師会にもはいっていなかった。すべて太田さんがとりはからって、開業届から何から何まで全部やられた。当時は健康保険はまだありませんから、保険医の資格をとる必要はなかったのです。

診療所と太田リング

太田さんの一番大きな目的は、そこで太田リングをやりたかったのです。

私は、「京都無産者診療所」くらいにはなると思っていたのです。ところが「洛北診療所」という名前でしょう。ちょっとおかしいな、とは思ったが、何もかにも太田さんがやられるので、当時武夫さんとか、太田さんとか、私たちは呼んでいました。田村敬男さんは今日はみえていませんが、彼は当時常連でした。

下には待合室、診察室、薬局があって、その奥に、婦人の患者さんが足をあげる手術台のようなものがあるんです。それは子宮口からリングを挿入する台なんです。子宮口を拡大してスッと入れるのです。いろんな理屈はあるのですが、太田リングは、今公認になり相当使われている確実な避妊法で、ピルが一番、二番が太田リングです。当時在所のかなりの人々に適用して、子だくさんの人々を救ったと思います。

太田さんには、何しろ自分の味方の医者がきてくれ、私たちも無報酬でやったものだから、よくはやりました。しんどかったですがね。

私は昼は大学病院の小児科につとめていて、夜六時～九時頃まで、ときとしては十時になりました。小児科の患者が来るとよいのですが、婦人科の患者、これは太田さんの方にふってしまう。外科はこの間亡くなった高橋さんがおられて、そちらへまわしました。内科のことはよくわからないのですが、まあ、まあこれは大体こなせます。往

診が多く、すんでから、大低五～六軒まわりました。

田中の地域は、いまは整然としていますが、当時は、まるで迷路です。どこの誰やらといってもわかりっこないのです。大体笹原さん、小林さん、それから十七、八才の青年が案内役でした。

中風の人とか、子供の患者とか、大部往診もやりました。診察がすんで、寝ようと思っても、二階は広く、三～四部屋ありました。私の隣りが八畳の間、そこへ、朝善、それから、いろんな人がきました。どこやらでストをやって逃げてきたとか、地下運動をやっているらしい人もきました。この前、亡くなった岐阜の北原泰作さん。彼は大部長くいました。あの人は若い頃だいぶんもてましたね。十二時、一時になっても、若いですから、みんなで、わいわい議論します。私は診察で疲れてしまい、本を読みながら寝てそれには、あまり参加しませんでした。

髪結さんの二階で下宿

毎晩うるさく、疲れているし、寝られないので困っていました。佐々木お岩さんという髪結いさんが診療所近くにおり、その人の二階に下宿をかわりました。というのは飯田三美(はんだ・さんみ)さんという私より二年上のお医者さんがいて、こゝで診療をしていました。その前は三高～京大中退の沢田平八郎君(共産党の活動家)が下宿していました。三美さんは福知山の大衆診療所にゆきましたが彼の去ったあと、そこは割合広かったので私はそこへ下宿したわけです。

田中ではトラホームの子供が多く、普通は一剤二十五銭の薬を十銭でやったと思います。今だったら抗性物質ができていて、治療は簡単ですが、その当時は硝酸銀で焼いて、そのあと硼酸水で洗い、膿をできるだけとってしまうのです。

この作業はなかなか上手になりました。小児科の子供がくると、ホッとしました。当時、私は数え年廿六才です。経験も何もない医者ですからむつかしいことをいわれると困りました。しかし、よこね、ひょうそうの手術もやり、中耳炎も多く、耳鼻科の耳洗いや各科のことをやりました。

患者多くて赤字

今だったら相当黒字だと思います。それが赤字なんです。当時、私たち医者は無給です。会計をやっていたのは田中地区出身の長田秀(ひで)さん。この人は全水本部にいた沖田留吉さんと婚約していたが、彼の死後こゝに勤務していました。

その前に、広田きよ子さんといって京大のストでやめた看護婦さんがいました。会計勘定はお秀さんが一人でやっていました。

聞いたら怒るかも知れませんが、田村敬男氏など、払ったことはありません、谷善さんも無料、左翼の人も大ぜいきました。もぐっていて病気になった人は全部無料にしました。金はもっていないし、この人達は当然のように無料でした。未収入は二～三割くらいはあったと思います。

普通の病院へゆけば二―三円とられるところを二〇～三〇銭でしたから、薬代、診察料一切をふくめ十分の一の治療費でした。それでも黒字になれると私は思っていました。

薬代について太田さんは、名前はいわなかったですが、大阪道修町のシンパから時々大きな箱に入って薬がくるんです。どんなルートか知りませんが、可成り良い薬が、例えば腎臓につかうヂュウカルチンなどが、ドカンと送られてくるのです。

とに角、患者が多いのですから、黒字になってよいのですが、まず赤字か赤字に近い状況です。

それを太田さんが自腹を切っていた。太田さんはそのことを、今度書いた自分の本――(太田典礼自伝「反骨医師の人生」(以下「太田自伝」と略称)――には書いていませんがね。お秀さんには小使いを少し出していました。そして、斉藤さんという看護婦と免許状のない見習看護婦もきていました。

故人の思い出
色川、婦人闘士・谷善など

「京都民報」にもちょっと書いていますが、田村さんの二階で病を養っていた色川さんのところには、ちょいちょいゆきました。色川さんはとても良い人でした。水戸なまりのある土浦(土浦うなぎで有名)の人で、私はいつも往診にゆくとき、ハムとかうなぎをもっていった。病気は結核です。往診料はこちらもちで、栄養補給にいつももっていったものです。大きな空洞があって、結局京大病院で死にました。寒い夜だったように覚えています。色川さんは皆様にお世話になりましたとお別れの挨拶をしました。

田村さんが色川さんの病気を最後まで世話しました。私はあれは正に表彰ものだと思っています。自分からはいい出しにくかろうが、このことは、水戸高校の人に是非聞いておいてほしいです。

それから女の人で廿四、五才の人で今いったら思いだすかも知れませんが、釜座の夷川かどこかの人で、いつも私たちは、夜の往診にゆきました。結核性の痔瘻で、左翼運動をやっている理由で、身内の人も、世話をしなかったのだと思いますが、いっぱいガーゼと綿花をもっていて、タンポンも包帯交換もやりにちょいちょいいったことを覚えています。この人も腸結核だったから間もなく死んだと思います。

結核という病気は肺に空洞が二つ三つあっても肺結核ではなかなか死にません。空洞があっても老人だったら知らん顔して日常働いています。腸結核では腸から栄養を吸収しないから、痩せ、衰えて、大体死ぬ。夕方、ポーと微熱がでてきて、頬が赤くなる。これは腸結核の初期でなく末期症状です。

色川さんも結局腸結核で死にました。左翼関係のもぐっている人の往診が多かったです。

谷善さんについていろいろと、あの人はとても慎重な人です。私たちのところに来るときには、洛北診療所のレッテルを貼った薬ビンをもってくるのです。保釈になって、活動したらいかん、自宅療養通院ということになって

いました。

その通院の間に田村さんのところから「日本労働組合評議会史」を出版しました。

夜になると活動していました。もしかして捕ったら、私にも「太田さんに今日くることになっていると伝えてくれ」と口裏を合わせることを頼みました。容態は痩せてはいたが、色川さんや婦人闘士のように、腸はやられていなかったので、これはいけると思っていました。無精ヒゲをわざと剃らず、養生につとめているような格構をして上手にカムフラージュしていました。

あちこちの無産者診療所

診療所は非常に盛況だった。ただ私は、考えてみたことは、太田さんはまあ可成り、医者として一人前でしたが、私はまだ、ヒヨコ、ほんのタケノコだった。医者としてほんとに勉強したかった。ここで毎日忙がしい診療はしていても腕はなかなか上らぬと考えていた。東京にいったとき、大崎駅に近いところに、大栗清一さんという人、この人は、はっきり無産者診療所という大きな看板を掲げていました。しかしレントゲンもなし、（大栗さんは卒業して一―二年の頃です）こんなことで診療して腕が上るのかなぁ、あんまり貧弱な設備だなぁと思った。

また亀有には千葉医大出身の人がやっていた。ここも設備が貧弱で、こんなことで医者をやるのはカナワンなあ。無産者診療所にいても、夜だけならよいが、昼は大学病院で腕をみがきたい。場は踏むから、少しは面白いこともあるが、無産者診療所に入って医者になれといわれても、私はもう少し、小児科の学問をしたい。こんなところではできないなぁという気持もしていました。いま、安井病院でも、どこでも、研究できます。立派な設備と組織をもっています。しかし昔の無産者診療所的なものは大阪の東成診療所にしても人間と診察机と若干の医療器具があるだけで、立派な診察がここで、できるとは思えぬ貧弱なもので、やっている人は一生けんめいで太田さんが一年を二年と間違えるくらい充実した日々だったのです。

診療所の幕切れをめぐって

太田さんの応召

洛北診療所が中止になりましたのは、太田さんが応召になったからです。一番肝心の本体が、上海事変で応召されたのです。それは昭和七年の一月です。もうどうも仕様ないです。私は開業の資格もなく、開業届も私の名前でなく、太田さんの名前です。私は大学病院の医者ですから、勿論医師会にも入っていません。太田さんが何から何までの主体です。仕方がないではないかということになって閉鎖したわけです。

応召後、一カ月くらいは私がやったのですが、ズルズルベッタリに閉鎖してしまったわけです。そのあとが問題なんです。

私は閉鎖した本当の原因は、田中地区だけの結びつきで、労働団体との組織的なつながりがなかったこと、これが一番です。本当に組織の上に立った診療所であれば、東京とか、どっかから応援を求めるなりして、続いたかも知れません。しかし、初めから太田さん個人の診療所という風な格構で出発したものですから、基礎ができていなかったというのが一つの原因でしょう。

それとこれはいやな話ですが、私は「京都民報」には「太田さんの個人的な事情でやめた」と書いたが、太田さんとおひでさんが関係あると、名前もわかっていますが、地区の人が詰問し、それで太田さんはものすごく怒りまして、そんなことなら俺はやめじゃ、これが大きな原因です。太田さんはカンシャクもちです。「太田自伝」には次のように書いています。

『私が意外に早く帰って来たので、田中の人たちがソヴエト友の会（後述　井垣）の事務所へきて診療所を再開して欲しいという。しかし、家も器機もなくなっているのはどうしたのか、と聞き正しても誰も答えない。組織もなくて初めからやり直さねばならない君たちの方で準備ができるのかと聞くと、全然無いという。それだと金も用意しなければならないし、速答しかねるといった。そして何故継続しないで潰してしまったのか、となじった。すると、一人が私の痛いところを握っているのだが、とおどしのようなことをいい出した。私には何のことだかわからないので、ゆっくり正してみると、私がおひでと関係していたということらしい。とわかって呆れ返ってしまった。早速、おひでを呼んできて白黒をつけてもらいたいと望んだ。間もなくおひでがきて、そのわけをきいて、きよとんとしている。私は彼女を大事に使っていたが、そんなまずいことをして尻尾をつかまれるほど馬鹿ではない。私は考え込んだ。善意が悪意ではね返ってくるようではやりきれない。もう手を引こうと決心して、再建はできないとはっきり回答し、後味の悪い幕切れとなった。そして京都では無診はできないままになった。』

指導教授の圧力

しかし、太田さんはそれをきっかけにしたと思うんです。もっと本当の実際は、太田さんは京大婦人科の岡林教授から、そのような運動はやめろといわれているのです。やめないと学位はやらない。教室から追い出すと教授はしょっちゅう圧力をかけている。この教授は右翼ばりの暴君です。

太田さんには三高のとき同級だった八木日出雄さんという助教授がいます。太田さんは九州帝大を出たんですが、京都大学に来たのは八木さんのツテによるものです。八木さんはエスペラントもやる自由主義者です。八木さんは太田さんを大分かばったらしいですが、太田さんはやめる潮時だと思っていたらしい。このことについて、太田自伝は次のように書いています。

『岡林教授が私をよびつけて、八君は夜間診療所をやっているそうだが、それがどうも危険だと警察から報告がある。この際君の決断を望むわけだ。診療所から手を引くか、大学をやめるか、どちらかにしてもらいたい。八診療所は貧しい人のために献身的にやっ

ているので、意義があると思っており、今更やめるわけにはいきませんし、ここでは先生のご指導で研究させてもらっているので、正直のところどちらもやめたくないのです。速答はいたしかねますのでしばらく考えさせて下さい〉といって引き下った。これは誰に相談しても駄目だと自分一人で考えていた。仲間は大学をやめろ、というにきまっている。永い将来の活躍のためには大学にいなければならない。といって診療所を引継いでくれそうな人は誰も見つかりそうもない。

すると一カ月余りして私の身のふり方に対して、突如として解決の運命が訪れてきた。警察が手を廻したかどうかはわからないが、七年二月上海事変に出征の召集令状が来たのである。』

「日ソ文化協会」時代

診療所が中止になったとき、私はお岩さんのところから、太田さんの前の下宿の田中下柳町に移り、太田さんと一緒に「日ソ文化協会」――ソヴェト友の会――を始めます。

太田さんが理事で、私と加納竜一君（今東京にいる）大島キクさん（後、加納夫人になる）の三人が書記です。

その事務所の場所は今もあります。水戸高校出身の武井一雄氏の経営する「臨川」の四、五軒西の方で、いま運送屋さんになっている。

一番パッとはやったのはロシア語の講習会です。奈良に井田孝平さんといって天理外語でロシア語の文学部長をされていて、岩波からロシア語辞典を出している八杉貞利さんとロシア語界の双璧、東の八杉、西の井田といわれるほど、ロシア語がよくできた。この方は東京外語の本当の継承者だといわれた人。私は交渉にゆき、週一―二回奈良から来てくれることになった。広告を出すと凄くやってきた。滝川夫妻、末川、住谷、具島健三郎、松田道雄、加古雄三郎氏等三〇人位やってきて、盛況でした。

パイ公が下にきて講義が済むまで待っていた。何人きて、何を講習したとか聞くので、いい加減の返事をしておいた。私も医学論文をいくつか翻訳できるほどになった。

加納氏はロシア語講習会の魅力的な広告を上手に描いた。第二回目の講師は京都の旧家出身で、宮本百合子さんとソ連にいったことのある湯浅芳子さんで、講習会のポスターを全市に貼りまわした。これが下鴨署の弾圧によって禁止され、何百円かの広告代がかさんだが、私はこれの尻ぬぐいをした。

福知山診療所
飯田三美・細見文治中心に

福知山に細見文治という人がいて大衆新聞を発行していた。細見さんの発案で、最初、安田徳太郎さんと太田さんが福知山公会堂で、一日無料診療をやり、大評判になった。これはゆけるということになって、大衆診療所というのができた。家は細見さんが段どりして内記四丁目に、元料理屋の三階建の大きなのを借り、飯田三美さんのやっていた北野診療所の器機などを全部もち込んだ。飯田三美さんは京大医学部を昭和四年卒業後、大津日赤の婦人科に、半年ほど勤めたとき、京都の四・一六事件で長谷川茂、草野悟一とともに検挙、起訴猶予でてきた。

大津日赤勤務の看護婦だった金枝夫人とともに、福知山に呼ばれていった。飯田さんの平民的人柄のせいもあって、たちまち大繁昌、一躍流行医になった。ここも診療券のいらぬ一剤十～十五銭の軽費診療です。飯田さんは北野時代、同じ婦人科医として太田さんから並々ならぬ指導と援助をうけ、しこまれています。この人はおそらく関西の党の一番大きなシンパだったと思います。当時の党の幹部黒木重徳と連絡があったようです。

私たちも医者になってから、毎月五円～十円のカンパを太田さんを通じてしていた。太田さんは決してバラさなかった。この点感謝しています。

私は、飯田さんが過労で倒れたとき約一ケ月応援にゆきました。そのとき人力車で廻るんです。あとで東京から大畑仁男さんもきました。奈良の岡谷実さんは、三日か四日でヘタバッてしまいました。私の方が体力があったんでしょう。当時診療所の三階にいろんな人が来ました。恐らくもぐって党活動をやって身体をこわした人でしょう。

飯田さんのとき最盛時には、一日百人ぐらいの患者がきました。

それから二ケ年余りたった頃、飯田さんは共産党のシンパとして検挙され獄中結核が再発して、仮釈放、一時郷里宮崎にかえり、さらに金枝夫人の郷里岐阜県恵那にうつって養生されたが、二年程して結核でなくなられました。

あとがき

◇これに続いて、学生消費組合にいた阪巻市雄氏（耳鼻科医）のいろんな面白い話、新潟県北蒲原の葛塚無産者診療所（当時医療同盟員六〇〇名）へゆき全農全会派の佐藤佐藤治氏とともに活動、そこをやめてから三重県衛生部長として、またその後の敗戦までの杉山さんの医師としての生き様のお話、懇談会の発言など非常に教訓的ですが、紙面の都合上ここでは一応割合させていただきます。

◇医療運動あけぼの会――無産者診療所を支えた人々――掲載の「無産者医療年表」によれば、

『一、昭和四年四月　解放運動犠牲者救援会その他の諸団体の提唱により八山本宣治記念無産者診療所をつくれ〉とのアピールが「戦旗」四月号に発表され、やがて東京で無産者病院実行委員会結成さる。

一、昭和五年一月廿六日　東京、品川区下大崎に「無産者診療所」開設さる。所長大栗清美。次に橋爪廉三、大崎無産者診療所を始め、その後、設立された各無産者診療所には東大セッツルメント、その他東京市内各大学、医専の卒業生、学生の積極的応援があった。滋賀秀俊ら援助する看護婦豊島まり子、砂間一良夫人ら。

一、同年大阪無産者病院、設立実行委員会結成さる。

（これに続き全国に無産者診療所設立運動が波及したことが記載されています。）

（文責　井垣次光）

―第一五回定例研究会報告―

蜷川虎三さんを語る

京都府前出納長　稲田達夫氏談

「語る会」第一五回例会は、四月十八日午後一時三十分より五時まで、京都市職員会館「かもがわ」を会場にして開かれました。出席者は二十数名。蜷川さんについてはお知り合いの方も多く、又京都だけでなく全国的にも地方自治、革新の灯台と云われて来た人だけに色々と思い出話しも予想され、従って今回は特にゲストを招くことなく会員で蜷川さんを偲んでの語り合いの場を持つことゝなった。懇談に先だち話題の引出し役として世話人の一人稲田さんから蜷川さんの足跡など語って頂くこととした。その話しは蜷川さんの先祖の話しから始まり逝去の日まで八十四年間の生涯に及び約一時間半。引き続き懇談の中では三月危機説をとなえて中小企業庁長官を「クビ」になった蜷川さんを京都駅頭に迎えての出馬要請の思い出や、京都市南区における新幹線計画に対する住民の運動の支援、日中不再戦の碑の協力など思い出話しに花が咲いた。

はじめに

蜷川さんについては本日ご出席の方はよく御承知の方が殆んどであり、また民主的な運動の面でも私から申し上げるよりも、むしろ大先輩の皆さんに私がお伺いしたい処です。

また蜷川さんや民主府政については、二十八年の間特に選挙の時などいろいろ言いつくされて来たことですし、去る四月十六日には各界の方々の手で蜷川さんを偲んでの集いが行われました。その上私は蜷川さんに割合近いところにあったものの一人で、近いものはかえって全体がわかりにくいものとも云われております、そして蜷川さんは政治家、学者、行政官、経営者、人間性など色々の面から見られて来た人だけに、一口に蜷川さんはこういう人というような適当な表現も見当らない、さらに人それぞれの見方があってもよいのではないかとも思われます。

そこで本日は蜷川さんがどのように生れ育ち学び教え働いてこられたか、その一端にふれさせて頂き、これがまたみなさんに蜷川さんや民主府政を知って頂く上に少しでも役立つことが出来ればと思ってお話しをさせて頂くことゝしたいと思います。

また、私達一人一人の人世や世の中を考える上にも得るところも多いのではないかと考え、その足跡を偲んでみたい。

蜷川さんの生涯は

一、生れてから水産講習所までの東京下町の時代
二、学び教えて来た京大時代
三、中小企業庁長官時代
四、知事時代
五、知事引退後の時代

便宜上この五つの時代に分けるとわかりやすいようです。

(一)下町の時代

蜷川さんは明治三〇年二月二十四日、東京の下町、深川の生れで、三男、本籍は芝の白金、この近くに加藤清正を祭るお寺があり、深川から本家に知らせる時清正公の碑に先にたどりついた方が名をつけたので虎三となったとも云われています。生れ年はトリ年でトラ年ではない。

蜷川さんの母は丹後の宮津本庄藩の裕筆飯島家の娘で、親ゆずりの学問好き、読み書きソロバンと云われた時代にこの母親からきびしく教え込まれたという。

火事とケンカは江戸の華と云われていた下町で、蜷川さんもケンカに負けて帰って来ると勝つまで家に入れてもらえなかったという。下町は言葉は荒っぽいが人情には厚い庶民の町であることは今も変りないようです。

小学校は地元の明治小学校で今も残っている。蜷川さんも一度この母校を訪れられたことはあるが同級生の消息を知る人もなかった。小学生の時、日露戦争が始まっている。中学校は同じ下町の府立三中で現在両国高校となって残っている。蜷川さんの五年先輩に芥川龍之介、二年後輩には浅沼稲次郎、同級生には反骨の弁護士と云われた正木ひろしなどがあるが、校長の八田先生は飾り気のない実質主義の教育を貫いた人、英語の先生には北一輝の弟吟吉などに学んだという。府立三中を卒業後は、同じ越中島にある当時の農商務省水産講習所に進むことになった。現在の水産大学である。その頃アメリカに住む叔父が「これからは水産の時代が来る。魚の研究をやれ」と蜷川さんの両親を説得したのが動機になったと云う。講習所では寺田寅彦、お天気博士の藤原咲平、海藻の岡村金太郎などの教えを受け卒業後も助手として残ることとなった。

こゝまでの道は勉強好きの母親と立派な先生に恵まれた暮しと、下町の風土の中で育った青年であったが、この青年が学問の道科学から革新の政治家への道をたどる動機となったのは何であったか、それは大正七年神田で進歩派の代表吉野作造と、黒龍会など右翼団体と見られる代表との立会演説会が開かれ、この演説会には学生や労働者がつめかけ蜷川虎三もその中の一人であった。吉野博士の次々と相手陣営の主張を論破してゆく姿に拍手を送り、早速吉野派に属する福田徳三の本を読んで「海の生産力は経済全体の中でとらまえるべき」と考え、河上肇の「近世経済思想史論」を愛読するようになり、河上先生のおられる京都大学で学びたいと決意するに至った。

(二)京大時代

大正九年、京都大学聴講生として入学、翌年本科編入、この頃京大経済学

部は黄金時代、河上肇、河田嗣郎、神戸正雄の三K時代とも云われた。先輩の末川博、恒藤恭などもその仲間であった。大正十一年律子夫人と結婚、大学院に進み、経済統計学を専攻、十二年には一人娘の思葦子さんが誕生。律子夫人はハイカラで庶民的な賢夫人で有名な人であった。

長い間蜷川さんへ出入の理髪屋さんの話しでも、あの蜷川さんがまさか選挙に出ることになるとは思わなかった。むしろ律子夫人なら婦人代議士として当選確実の人だったと話していた。律子夫人は婦人の自動車運転免許全国第一号、婦人のタクシー運転手の最初の人でもあった。タクシーをやる前にはタイプライターも学び、働く腕を身につける努力を惜しまなかった。今各界で活躍中の教え子も、蜷川さんは二階で勉強階下の部屋では律子夫人が教え子達の世話をやいていたというが、この夫人も戦後教え子の看病から発病不帰の客となった。

昭和三年の助教授に就任後、統計学経済政策研究のためドイツなどに留学アメリカを経由して帰国したがその途中でニューヨークでの株式の大暴落、世界恐慌の始まりにぶつかり、インフレの行きつく先は恐慌か、戦争かという持論の説明にもよく引用されたものである。この留学中に一人娘の思葦子さん宛に送られた絵葉書は数十通にも及び、その一通一通がヨーロッパやアメリカ各地のものを選び子供にも読めるように全部カタカナで体に注意する事。勉強すること。母親の云うことをよくきくことなど書かれてあったと云う。このことは蜷川さんの子供教育の土台になったようで、男女同権も健康と働く腕を身につけることが基本となっていた。外遊のため京都駅出発の時河上肇先生も見送りに来ておられ、その時河上先生が一人娘の思葦子さんの頭をなでられたので、後になって蜷川は「赤」だという当時の警察の人がいっていたとかいう話しにもなったと云う。蜷川さんが留学中に三・一五事件が起ったことも合せ考えると、当時の背景の一面を物語るようだ。昭和十年「統計利用における基本問題」を発表経済学博士となったが、すでに日本はひたすら軍国主義の道をたどり続け、学問の研究にも教育にも自由は抑えられつゝあり、思想弾圧もきびしくなってからは弾圧を受けた学生のもらい受けや、内緒で河上先生を訪ねるなどの時代でもあった。河上先生の日記の最後の日には蜷川さんからタイが届いた旨書かれてあり、この日から数日後他界された。

蜷川さんに最後のお別れ

故蜷川京都府前知事の遺骨は，４月26日京都市東山七条の智積院墓地に納められた。蜷川さんの教え子〝昭友会〟の方がた。各界各層から約100名参列，娘の安井思葦子さんが墓碑を除幕，故　律子・多津の両夫人に囲まれた墓に納骨，智積院の佐藤執事の導師で参列者一同　宮川さん筆の〝蜷川虎三墓〟に白菊を献花，遺徳を偲び，永遠の別れを告げました。

知事就任後、府会で反対派から戦時中における蜷川さんの書物の一部分がとりあげられ、戦争協力ではないかと質問があったが、蜷川さんは当時私は帝国大学の教師であったとだけ答弁し言訳はされなかった。あえて帝国と言われた言葉の裏には、そこに席を置いて学問の研究をし、教育にたづさわり、文筆の活動を続ける限りにおいては、一見協力的とも見える表現をどこかに入れておかなければ動きがとれない時代であった事を言いたかったようだ。

昭和二十年経済学部長に選ばれて間もなく敗戦となり、経済学部教授全員の辞任を提案学部再建のメドをつけて京都大学を去った。

蜷川さんは京大時代に学校荒らしの別名がつけられた程多くの学園で教え、立命館、同志社、大谷、成安の外、関西大学、相愛女子学園などに及んでいる。又当時京都一中現在の洛北高校でも教壇に立ったこともあり、その講義が労働は商品なりという言葉で始まったことは今も教え子の語り草になっている。

(三)中小企業庁長官時代

京都大学を去った蜷川さんは、大阪にあった鉄道教習所の講師をつとめるかたわら、京都の中小企業の経営者を中心に、四条寺町下る浄教寺で経済懇話会を開き、京都府下の福知山や綾部の中小企業者と共に経済の勉強会などを開いていた。中小企業長官かつぎ出しの経過は、私からお話し申し上げるよりもこの会の会員カニ江邦彦さんの方が適当と思う。カニ江さんは水谷長三郎の秘書や参議院議員をつとめられ、蜷川さんかつぎ出しの時もその役割を果した人であった。戦後片山内閣が発足して水谷長三郎が商工大臣となり、内閣総理府に引き継がれて中小企業庁の設置となったものの、長官に適当な人材が見当らず、水長さんも困ってカニ江さんから蜷川さんに話して欲しい

と依頼したと云う。カニ江さんは、とにかく東京まで来て頂いて一度会って欲しいと、汽車の切符まで置いて帰った。蜷川さんは勿論引き受ける気もないので、上京して断わればよいと思って東上したが、水長さんに会った処、当時はまだ連合軍の占領下でその関係者にも会ってとにかく私の顔を立てゝくれと云われたり、いつ迄もとは云わないから、一年でも半年でもと云われ、うまく水長にはめられた形で、引き受けさせられたと云う。長官就任後は中小企業の協同組合、企業組合の結成について法案をつくり、結成を指導敗戦後の経済復興に活躍した事は多くの人の知る処である。朝鮮動乱が近づくにつれていわゆる行政整理、企業整備の名のもとにレッドパージィの嵐が吹き荒れ、中小企業庁も例外ではなかったが、蜷川長官は中小企業庁にそのような職員は一人もいないとつっぱね、首を切るなら先づ長官の首を切れと云ったとかで、組合側がこれをたれ幕にして世間を驚かせたと云う。朝鮮半島の雲行きが危くなり、占領政策と日本の経済や国民の経済とのへだたりは次第に大きくなりつゝある時、蜷川長官は三月危機説を発表した形となったので、当時の池田大蔵大臣初め吉田総理の取りまきの人々は苦境に立ち、吉田総理に報告、其の時「そんなものは首だな」と笑っていたと云うが、取りまきは首と受け取り公表、蜷川さんも長くつとめる気はなかったから予め辞表は提出してあったので、辞表は前から出してあると云ってそのまゝ中小企業庁長官を去ったのである。たまたま関西出張中の出来事で、昭和二十五年二月の事であった。蜷川さんは中小企業庁長官就任後に多津夫人と再婚。しかし長官辞任から知事候補かつぎ出し、知事への激動と激職の間の家庭を支えた夫人の生活で、革新の知事の座も栄光でも何でもない。二人揃っての外出も稀れで、選挙投票の時と、ごく親しい人の結婚式程度であり、見物も旅行もないまゝ、知事退任の前年の夏この世を去られた。

(四) 知事時代

京都の革新自治体の始まりは何であったかと云う事について若干ふれて見たい。戦後京都市長であった神戸正雄さんが、政府の地方財政の委員として就任する事になって、その為急に市長選が行われることになり保守が田畑盤門と和辻春樹の二陣営に分裂、これに対し民主陣営は高山義三をかついで統一して斗った。その母体は全京都民主戦線統一会議でありその背景には地労協の統一した力があって、みんなの総力を結集高山市長を実現させた。この時の選挙で保守派の選挙違反のうたがいが木村知事に及び、急に知事選が行われる事となったのである。高山をかつぎ出し見事当選させた民統会議は勝利の波に乗り、末川か蜷川か以外にないと早くから考えていたが、末川は固辞、結局残る蜷川に白羽の矢が立てられた。当時水長さんとしては、最初高山さんを参議院の候補に考えていたが、これを市長選にとられた以上、丁度蜷川さんを参議院に出して革新政権の経済閣僚の準備をするのに都合が良いと考えていたところ、再び知事候補に蜷川さんを出さざるを得ない事となった。勿論蜷川さんは出馬の意志は全くなく、たまたま整理の為東京から帰宅した処を、駅で民統会議の代表が出迎えて説得し、色良い返事が得られないので連日下鴨の自宅へ押しかけ蜷川さんに出馬をせまった。これら関係者の熱意に動かされて出馬の決意をし、立候補届も告示後三日目であった。相手の候補者は副知事で其の後参議員や京都市長をつとめた井上清一さんである。

蜷川さんかつぎ出しの裏方の事情は、生水徳松や谷口善太郎さんが良く御承知であったが、お二人共故人になられた。佐々木義雄さん、梅林信一さん。浅川亨さんなどまだまだ御健康な方も多く、これからも色々お教え願いたいと思っている。

それから七期二十八年、革新知事としての足跡は知る人も多い事でもあり、又府政の中に身を置いていた私が申し上げるよりも、むしろ府政がどうであったかをお伺いすべき立場にあるのでひかえさせて頂くとして、前にも申し上げたように、蜷川さんは京都府民の代表者であった事は云う迄もないが、政治家として学者として、また行政官として、経営者として、人間として魅力と力量のある多彩な人であった。しかしこれだけのものが一つの人間の中にあって何ら矛盾せず統一が出来ている処に、蜷川さんの偉大さがあったのではなかろうかと思う。

憲法を暮しの中に生かす事を基本理念として
戦争に反対し平和を守る
反動と斗い民主主義を守る
中央直結に反対し地方自治を守る
資本の圧力から生活と経営を守る

と云う四つの柱に支えられていた。

勉強好きの母親の下で、下町の庶民性と正義感、明治のガンコさ、学問の道から革新の道へと蜷川さんをめぐる周辺の状況についてその一部をご紹介させて頂いた。

蜷川さん自身「主体制なき人生」と云われており、自分で自分の道を選ばれたのは、京都大学に行って河上先生の処で勉強したいと決意された時だけで、あとは周囲の状況の中で流されて来た人であるとも云えるのではなかろうか。

(五) 知事引退後

知事引退後の状況については〝燎原〟前号で多少ふれさせて頂いたので本日の処はひかえさせて頂きたい。革新の政治家として、又知事として二十八年の実績は、二十八年間特に選挙の時など色々ふれられてしまったので、今日の処はむしろそれ以外のしかも蜷川さんをめぐる周囲の状況についてふれさせて頂いた。

誰れでも小説は書けると云われる、それは自分の人生をかく事だと云う。蜷川さんの人生ともなれば多くの教訓を与え、末だ〳〵面白い話題も多い。

蜷川さんを知って頂き、又蜷川さんの民主府政を知って頂く上に、少しでもお役に立つ事が出来ればと思い、懇談の糸口にとお時間を頂いた次第である。何しろ急な事で原稿の準備もなく思いつくまゝに前後した処もあり失礼の段お許し頂きたい。

◇随　想(8)

一矢を酬つた話

住谷悦治

(1)

同志社の昔、といっても、今から八年ほど前の話であるが、わたくしが、かって同志社の教師をしていたアメリカの「ラーネッド博士伝」という著書を三冊ほど携えて、博士臨終の地ビルグリム・プレースという、外人の集団地を訪れたときのことである。自著を故博士邸の図書室に献呈するための往訪であった。ピルグリーム・プレースというところは、アメリカから派遣された海外宣教師が、使命を果して帰来してから、晩年まで静穏に悠々とした生涯を送ることのできる、老宣教師村とでもいいうる別荘地帯のような所である、相当広い区域で、森や林の木立のつづく閑静な地域に住民があちこちに見え。補装された広い道路が、住宅の間を縫って、遠くまでつづいている。時折老人を乗せた自動車がごく静かに往来するのに逢う。時には老人自らが自家用車を運転してヨチヨチとやってくるのにも出会う。いわば規模の相当に広い老人ホーム村落である。

わたくしはその中央事務局とでもいえる管理所に赴き、自著「ラーネッド伝」を寄贈した。恰かも昼食間近い時刻だったので、事務局の係りの人から昼食を共にするよう勧められて、そこの集会場―食堂兼用の広い室に案内された。昼食時には五十名ほどの会員と食事を共にしたが、事務局の係員が私を一同に紹介し、「ラーネッド博士伝」二冊を示して、それを回覧するよう渡された。一同大拍手をもって紹介が終り、賑やかな昼食の時間が終って散会した。

(2)

食事のあとはしばらくは、あっちこっちで談笑のグループに分れて、好き勝手な放談で時をすごすが、わたくしのテーブルにも数名の者が集り、それぞれ勝手な放談が交されたのであるが、アメリカ南部地方の小さい町のことと て日本人などテンデ問題にもしていない自由な放談で賑った。アメリカ人といっても、その地方では柄のわるい人間も多く、われわれが知っているような、いわゆるアメリカ紳士は数が少ないのには面喰ったのである。彼らの放談は賑やかで、新参者のわたしなどテンで相手にされない。おまけに私のマゾイ英語では彼等の相手にはなれない〝ジャップ〟などと云われて立腹してもことは始まらない。お互いに相手を軽視しているかのようで、自由放談の言葉は一知半解で、気楽ではあるが馬鹿らしくもあり、軽蔑もしたくなるというわけである。

「オイ・テメーはどこから来た人間か」といった調子である。だからこっちも、一知半解のシドロ、モドロ丸出しで突き当るほかはない。だから度胸のない人間は全然おいてき放りである。こんな状態だから厚かましいことが第一の生きる条件である。遠慮なんかしていては全然「置いてきぼり」にされてしまう。ゲスッポイ言葉が口をついて出てくることを覚悟せねばならないわけである。愚劣極まることを当然として実践せねば生きてゆけないのである。

(3)

そういう雰囲気の地帯では、そのレヴェルで突かかるほかはないわけである。驚ろいたことには、日本人も中国人も、東南アジアの人間も全然区別されていない。集団で、東洋人など十把一とからげである。黄色い人間を見ればWheteh nose are you? chinese or Japanese? などという失礼きわまる言葉で問いかけてくる。こいつ殴り飛ばしてやろうか、と思っても腕力ではとても及ばない。だから返答にはそれ相応のケンカ腰になる必要がある。こんな他人をコバカにした問いかけにはWheteh ky are you? Donky, monky or yanky? と言いかえしていいわけである。

文明開化の先駆者、日本開国の恩人アメリカにも現にこんなていどの低いアメリカ人も、所によって再生産されつゝあるというわけで、人類の進歩も、文明開化も、ずいぶんヒドイ低劣な外国人も再生産されつゝあることを、考えのうちに入れておく必要もあるのではないか？　ひろいアメリカの未開墾地域にはやはり無知厚顔が再生産されつゝあるといわねばならない。現在でも幕末、明治時代の徒らなる外人崇拝の観念が無いとは言えないし野蛮的・未開拓地域もあることをも考慮しなければならない。

(4)

文明も文化も、一般、平等に発達展開しているわけではない。まだまだ、細心に反省すべきことが無いとは言えない。未開・野蛮も再生産されることが無いとはけっして云えないのだ。文明とか文化ということには、細心に、熱心に、隅から隅まで考えねばならない。こんな徳川時代の世界的な文明開化にも思い及ぶことがなお必要不可欠のことである。

現在的意味をもった世界的文化への道が、もっと広く深く、堀りさげられねばなるまいと思われる。型の変貌した、野蛮未開が、いま皆無だとは言えないということを、真剣に反省すべきではあるまいか？

○寄贈図書資料紹介○

「風雪佐越」第二五号　解放運動新潟県旧友会の会誌特集〝自分史第二集〟B5判三〇本書の最後に、次の如く記されている。

〝年三回発行をやりぬくには発行人の不退転の決意と努力なくてはできぬことを思い知った。自分史続編を浦沢、石崎、森田の三氏、佐渡の河原、仲川。豊栄の斉藤、津川の田崎の四氏を新しく運動に加え、さらに三条吉田兼治七年忌に際し、知友の懐旧談と、〝自分史発行の反響を集録し、資料佐藤和藤治回想は次代に語り伝えたく、筆者に乞うて転載したと

発行所　新潟市沼垂東二ノ八ノ一七　解放運動新潟県旧友会　森田小一郎氏

「土曜日」以後 (四)

斎藤雷太郎

「土曜日」の関係者に会ってはならぬと、固く云われて居たが、ひそかに何人かの関係者のお宅をおたずねした。早く出られるいゝ手段を、お知らせするわけではないが、先生方の様子も知りたかった。

下鴨署に留められて居た時、撮影所から休職の辞令書を持って来た。手まわしのいゝ事をするものと思った。

釈放されてから退職金を貰うつもりで撮影所に行くと、撮影所に入れないのである。門衛を怒鳴りつけて、今小路所長（元警部補）に会った。退職金を貰えば、二度と来ないのであるから、くだらない小細工はするなと云ってやった。所長は企画部の加納氏（「スタジオ通信」発行に協力、「土曜日」にも執筆）を交渉相手に立てて来た。二三度話したが平行線である。

最後の手段に所長の自宅に行った。細君や子供達の前で、所長と女優達とのスキャンダルや何かをならべ立てた。細君と中学生と女学生位の子供達は、かしこまった顔におどろきの色を出して聞き入って居た。そこへ所長が帰って来た。私の用件も聞かずうろたえ顔で「とにかく君、明日撮影所で話を付けるから帰ってくれたまえ」と云うので帰った。

翌日撮影所で会った。私は阪妻時代月給五十円で、阪妻と松竹の合併当時の発表で、私の名前は、かなり上位の方に書いてあった。それが古い人々の反感を買ったようである。何ケ月か後の人員整理の折、それが月給四十円に減額の形になって現れた。

それであるから、五十円也の割で三ケ月百五十円也の退職金を出せと云った。所長はぶつぶつ云った。私は、貴方の金を出すわけでなく、会社の金を出すのであるから、無駄なマサツをくり返すより、気持よく出して貰いたい、退職金を貰えば二度と来ないのであるからと云った。自宅に押しかけられたのがこたえたのか、所長は最後に、いまいましそうに百五十円を投げ出すようにして出した。これで松竹と私の縁が切れたのである。

監察所の松山所長が、他の撮影所に世話してやるからと、応容に云ってくれて居たが、どの撮影所からも斎藤だけは勘弁してくれと云われたとかで、撮影所就職の話はお流れになった。

私は下加茂時代、ズボラをして半月位しか働かなかったが、「京都スタジオ通信」から「土曜日」まで三ケ年位の間、松竹作品や他の会社の作品も、公平で良心的な立場で映画評なぞ書いて居る。宣伝にも役立って居る筈である。したがって私のサラリーよりはるかに高い価値を松竹に寄与して居ると思う。松竹や他の撮影所から、毛嫌いされるいわれはないと思うが、映画資本の動きは複雑である。

半年近い日が過ぎた。職選びなぞして居れない気持である。新京極吉本の花月劇場に出演して居た洋子・陽之助の剣激劇団をたずね、座長の陽之助に会い入座を頼んだ。幸に入座できた。

慢才の今喜多代・洋之助の島洋之助と、ワカナ・ひろしの島ひろしとは、その頃劇団で一緒であった。私は永井瓢介の芸名で出演した。「忠臣蔵」の吉良や、「国定忠次」の川田屋の父っさんなどを演った。下加茂では無名だったが、これ位の役は、演らせれば出来ることを、云いたかったので書く次第である。

大阪新世界、京都新京極、東京浅草等の吉本系の劇場をまわっている内に、一年近い日が過ぎた。

（未完）

故国領五一郎墓前祭

三月十九日、正午～一時、左京区黒谷の見真院で、戦前、日本共産党の指導者として活躍し、長い獄中生活の末一九四三年（昭、一八）大阪の堺刑務所で獄死された京都の生んだすぐれた革命家、国領五一郎氏の墓前祭が例年のように、六十余人の参加者によって行われた。

前衆議院議員梅田勝氏の開式挨拶、と、黙禱、見真院住職による読経のあと次の順序で各界代表の追悼のことばと、闘争への決意表明が行われました。

安井信造日本共産党京都府委員長、増田行雄日本民主青年同盟京都府委員長、南光善兵衛全西陣織物労働組合長、平田武義国民救援会京都府本部副会長、井上喜代松京都旧友クラブ世話人代表。

親族の方としては、五一郎さんの実弟故巳三郎さんの未亡人操さんと娘の薫さん、同実姉藤岡クニさんの娘の勝代さんが見えていました。墓前祭終了後、見真院で故人を偲ぶ懇談会が行われた。

○

〝燎原〟のもつ深さと、不屈の歴史に敬意を表します。

（城陽市　立白従道）

〝山宣研究〟

昭和56年3月15日刊　第6号　800円

内容

○山宣と大山郁夫
○映画〝山宣告別式〟他
○山本宣治の知識論
○花やしきの徳太郎さん(1)
○労働学校・山宣の想い出
○会員通信
※　資料・解説
○山宣の性学調査(1)再録
○『産制評論』（山宣記念号）
※　会の活動（事務局）

中村高一　北川鉄夫　佐々木敏二　小田切明徳　森本幹一　平井重太郎　本多季麻呂　安田徳太郎　成田龍一

申込所
京都市上京区烏丸今出川上る同志社中学内
小田切気附　同志社山宣会
TEL　075－251－4353番
振替口座　京都　19536番

・投稿歓迎・

医家に生れて

矢野恒範

先般の堀芳次郎さんの農民組合運動のお話と杉山茂先生の無産診療運動の思い出を聞き切実な感銘をうけた。

私は大正年間の少年期を阿蘇の噴煙を一望することのできる熊本、菊池平原の一寒村で、医師を父として過しました。当時の農村の病弊はひどく、私は父の往診に連れて行かれたことがありますが、患者の農家の人が破れ障子のうす暗い室に寝ていた姿に、子供心に悲しい思いをしました。当時の医者の薬価は盆と暮の年二回払いで、その薬価を払えない農民の苦しい生活の話を、母と女中が夜の長火鉢を囲み話し合っていたことを覚えています。病気のために畑を売った人、娘を借金のために奉公や苦界に出したなど、哀れな話でした。

私が小学校に通う頃、農家の子供は下駄を履いた者は一人もなく、皆藁草履でした。また鞄を持った者もなく、風呂敷に教科書を包み、腰に巻きつけて通って居りました。夏になると水の悪いためか急性腸炎、疫痢、赤痢が流行し多くの子供が罹病し、入れ薬の売薬などで手当し、死亡する者が多いようでした。私も赤痢にかかり苦しんだ思い出があります。

○

明治のインテリでトルストイアンと思われた私の母は、貧窮した農民に同情し、このような農民からの収入で生計を立てる医師の生活に疑問をもっていたようです。父の死後私の進学について、母は数百年来の大家族主義の矢野家の方針に従わず、私が医者になることに反対しました。

矢野家は数十代続いた武家の家で、幕末から曾祖父・祖父・父と医者になっております。祖父大玄は肥後藩の左派実学党の指導者横井小楠伝に出ております。小楠は京都寺町通り丸太町下ったところで右派の連中に暗殺され、現在そこに碑が建っております。小楠の思想は熊本バンドに流れ、徳富蘇峰・蘆花兄弟、海老名弾正、蔵原惟郭（共産党幹部蔵原惟人の父）その他多くの人材を生み〝同志社〟へ開花しました。蔵原惟郭の妻は熊本が生んだ世界的な医学者北里柴三郎の末妹であります。

○

後年、私は社会運動に関係し、無産者の診療に献身する新興医師連盟の組織があることを知り、母の理想がもう一歩前進していたならば、と思いました。戦後私が民主医療機関の活動に参加したのもそのためです。杉山先生の話に出た戦前の〝無産者衛生必携〟を私は持っております。昭和七年二月十八日発行で定価八〇銭です。この必携は私が特高の家宅捜索をうけた際に、本の表紙を張りかえていたので、難を逃れたものです。必携の巻末にある「日本無産者医療同盟」のスローガンは下記の通りです。

1. ブルジョア独占の医療制度絶対反対、2. 労働者農民の病気は、労働者農民自身の手で治せ。3. 無産者診療所の全国的確立とその拡大強化、4. 全勤労者、学生、無産市民は日本無産医療同盟に入れ！。

最近の世相は昭和初期に似てきましたが、我々も一層がんばらねばと思います。皆さんも御自愛の上御活躍を祈ります。（右京区西京極東側町二五）

長田お秀はんのこと

西村清三

四月例会での杉山茂先生の「洛北診療所」のお話しのなかで、「長田ひで」なる美人の未亡人がでてきますが、お秀はんの名誉のため一筆します。

長田ひでさんは、昭和八年に私たちの全協再建に協力してくれた。とくにカネボーで働いていたというので、全協の街頭オルグをやってくれた。同年六月二十日の大弾圧のとき彼女はつかまらず、大阪へ出て、勿論もぐってかなり長く活動していた。当時私は山科刑務所にいたのでその後の消息は知りませんが、戦後S二八年頃、会う機会があって、よもやまの昔話をしたが、杉山先生が言われたO医師との関係はウワサ話で、診療の頃Aに追い廻されたことがあるといっていました。その後診療所を出て、関鑑子さんのお父さん方でお手伝などして逃げていた。昭和八年の六、二〇以後は、いろいろ苦労したが、たしか占部某氏と結婚し、離婚してからも占部の性を名乗っていた。

杉山先生の話し中、左翼の人がよく来た云々の中の一人が私だったので懐しく当時を思い出しています。

（伏見区桃山町本多上野一六ノ二）

品角一郎氏を悼む

五月四日朝、本会の会員で画家の品角一郎氏が、中京区の右京病院でスイ臓ガンのため死去された。享年六九歳まことに残念です。

品角さんは明治四五年二月宮津に生れ、小学校卒業後、三丹新日報社や宮津町役場の給仕をして家計を助けた。

昭和二年、画の修業に京都に来り、染物工芸を学ぶほか、日本画、洋画を勉強中肺患のため昭和六年帰郷、療養中も、左翼雑誌「記録」を発行、「帝国美術」や「美術評論」などに寄稿文筆活動をつづけた。

昭和十二年再び京都に来り、「東方美術協会」などを創立し新聞雑誌に論文を発表。同十四年春、京都日々新聞社の後援で個展をひらき特高の弾圧をうける。

戦後日本共産党に入党、京都府委員会の農民部長として農民、市民、文化運動に参加し、三八年には「京都民主主義美術協会など結成その責任者として活動、さらに、京都文化人交流会（愚談会）事務局長として活躍された。

また、品角さんは本会結成と同時に入会、本年一月発行の〝燎原〟新年号に「四国石槌山にて〟のスケッチと、〝四国紀行〟を寄せられている。品角さんの人柄が偲ばれます。

品角さんの告別式は五月六日0時半から北野の立本寺で営まれ、各方面から五〇〇名程参列別れを惜んだ。

なお本会は、本月二三日の定例研究会を「品角さんを偲ぶ集い」として、故人の思い出を語ることにしている。

旧友会全国有志の交流会を望む

新潟　森田小一郎

前略、彗星の如く、突如送られてきた〝燎原〟ただ驚嘆しています。

新潟の旧友会は昨年十八回総会を迎えました。私が事務局長となってから十年です。東京旧友会の名簿をみると全国的に旧友会と名乗るのが三〇余。手紙を出して返事をくれたり、年一回でも会報を発行しているのは、広島、和歌山、石川、長野、新潟、北海道、東京ぐらいにすぎない。

新潟旧友会では仲間が集まり、酒を呑み、昔話をする。三回やると顔も話も新鮮さを欠き、会費もとれず、人も集らず・自滅状態で私のところにもってきた。私は新潟地震のあとは、伊勢湾台風の教訓を学び、もっとも被害をうけた生活保護者を中心とした生活と健康を守る会をつくり、階級闘争として地震を天災でなく、地下のガスを乱堀して、地盤の空洞化が被害を大きくした。従って被害の補償を求める闘いがありました。

天災でなく人災である観点に立って闘うことが、全国から参じた民診活動家の結論、そしてその闘う組織者として私を適任者とした。新潟民商の建設に十年、店をつぶし、身体をつぶし、療養所生活満四年、助骨七本切除して右肺の空洞を圧縮して排菌をとめて退所、専門の書店経営に打ちこみ、一ケ月約一〇〇万円の売上げ、年令も六〇才、その日のめしの食える仲間の中に同化することもできない。仲間も同化できず、排他、ねたみ、そねみで自分で自分の身を傷つけて協同、協力に背をむけているこの貧困層の組織ができない。五回、六回、七回懇望されて断りきれず、家族と別れ、貧困層の密集地域に一人世帯を持ち、自炊で最低生活を五年間、生活する権利、病気を治す権利、子供を教育する権利を主張して市役所に座りこみ闘争をくりかえし、遂に法律にないが、県・市に法律外の援護法をいくつも実施させた。五年目の十二月の越冬資金要求の座りこみに、十年来忘れていた洛血、爾来一年の三分の一以上病臥生活をしていました。

○

こうした病臥生活の中で無給で私に協力し、財政を支えるものとして会報「風雪越佐」を刊行。前任者が金がなく原稿がないとガリ版刷でも欠けているときタイプ印刷。旧友会に解放運動の四字を加えて、会報を「風雪越佐」と命名した。昭和初期は警察・拷問・失業・飢え・牢獄に通ずる道を覚悟の私たちの青春だった。命をかけたいばらの道、下積みの道で苦労したが、わが青春誤てりと嘆じたことを知らぬ。

新潟県旧友会は、幸徳秋水事件連座の内山愚堂、亀井戸事件の平沢計七、河合義虎などの事蹟紹介、木崎小作争議の生き残りから闘いの説明をきき遺族の参加で物故者追悼祭を、そして、講演会、懇親会を開いの現地とした。

従来県下新潟で社会的に知名の士の選挙のショーで終り勝ちを排して、現地に何度も実行委員会をひらき、遺族を参加させ、挙げての木崎大争議をパノラマ式に復元しての総会、警察に押収されてねい筈の地主真島の顔を型にしたせんべいを、関東中心におかみさんたちが闘争資金カンパを集めた真島(まじま)せんべいの原型が発見され、また当時の東京中心の各新聞のきり抜きブック帖の発見など、光が底にとどいての活動でした。

これらの活動が革新新潟市長を動かし、土地を一〇〇坪借りて、新潟県解放運動戦士の碑五〇〇万円カンパが結実して樹立した。

以上簡潔に新潟の動きを述べました。

○

そこで私は貴燎原社につぎのことを要望したい。

京都という革新府政の伝統のある場所であり、また〝燎原〟の編集ぶりを見ても並々ならぬ人材が揃っていると思われるので全国各地の旧友会または有志の交流会を提唱してもらいたい。

各地の会報を見ると、東京旧友会会報に見習って、会員の近況紹介だけに会報を埋めている。近況は大切であり何より先きに見ます。しかし『私たちはどういう時代をどう生きてきた』ということを、次代に語ることが私たちの大きな仕事です。次代などどうでもよい。指導力などない、という声もあります。旅行ブームです。各地の旧友会で、今年は京都の山宣祭に参加、来年は北海道での多喜二祭に参加もよい。さらに佐渡見物よし、四国めぐりもよし……。〝燎原〟が全国の旧友会の結合点となると、歴史教育者協議会に結集している高校の先生たちの協力その他が産れると思う。

ぜひ、全国の交流会を呼びかけ、話しあいの中に協力し、全国的な運びが産れることを望んでいます。

（新潟市沼垂東二丁目八―一七、解放運動新潟県旧友会事務局長）

全国各地から

記事訂正を燎原誌に！

石川県　村井嘉明

毎号〝燎原〟誌を注文通り余分に送って頂きありがとうございます。

今春「京都旧友クラブの会報」新年号に寄稿した管野富次との出会いについて間違いがありましたので、貴誌上をかりて訂正したいのでよろしくお願いします。

それは兵庫県三田市の藤井英男氏に教えられたのですが、於文中に「北野兼三郎」氏について右翼の組織に入ったと書いたのが間違いです。

事実於氏は大阪で保護観察をうけ、運動に関係あった婦人と結婚、当時大阪市西区桜川町に住んでいたが、昭和十八年に応召、篠山連隊へ入隊し、その後ニューギニアに派遣され、そこで戦死されたそうです。同氏が篠山連隊へ入隊のさい、藤井氏が営門まで見送られたそうです。

次に、日比野工場で〝戦旗〟配布の島木重俊氏は、一時小松市五国寺町の郷里に妻子と共に疎開していたが、昭和十九年満州に渡り、現地召集をうけ戦後新京の自宅に帰ったが、引揚げのとき夫婦子供三人が病死し、長女一人小松市に帰り、島木本家の養女となり今は婿をもらい二人の母となり市内で働いています。（小松市古城町八五）

〃燎原〃社の皆様

東京　江口常平

〃燎原〃誌代をお送りします。

自民党内閣の反動右傾化の政策が行政・司法の各分野で急テンポで進んでいます。戦前の戦争前夜を思わせるものがあります。世界の悪法治安維持法の下での活動の経験、足あとをいまに伝えることが重要になってきたように思います。〃燎原〃の誌友、読者拡大に御尽力をお願いします。

東、西（関東・関西）の交流のような記事も興味があるのではないでしょうか、編集の皆さんに感謝して読んでいます。（調布市若葉町二ノ四ノ一）

会員誌友だより

京都戦後史を

京都　伊藤　晃

ご健闘をいのります。

北牧さんのすすめで入会しましたが、毎号興味深く読ませてもらっています。

私も京都の民統史を数年前扱ったこともあり、資料収集の必要性を感じながら事情があって中断していました。

できれば京都戦後史について、とくに一九四五～一九五五年に重点をおきいまのうちに関係者の「証言」をテープにとっておく計画的な作業が必要と考えています。貴会の事業にでもしてもらえればと思います。（左京区静市市原町七四ノ四）

（註）例会の内容は全部テープにして保存しています。（係）

身のひきしまる思い

京都　有田正三

誌代ご送附申上げます。（二年分）

先輩の方々のご活動をご教示いただき、身のひきしまる思いがいたします。

今後ともご健斗下さるよう、お願いいたします。

（長岡京市天神四ノ一二ノ二〇）

慚く元気を回復

京都　宗川磯雄

多病、老令、一さいの会合、集会を絶ち、ひたすらちっ居しています。さいきん慚く元気を出しましたので、一度お訪ねいたしたいと存じております。

（左京区一乗寺庵野町三五）

領収書に代えて

――事務局より――

引つづき左記の皆さんから、会費（年額三〇〇〇円）、誌代（年額二〇〇〇円）カンパを頂きました。ありがとうございます（敬称略、順不同）

記

三〇〇〇円	渡辺　廣	（和歌山）
二〇〇〇円	和田　美代	（右　京）
三〇〇〇円	横村庄一郎	（下　京）
五〇〇〇円	平林　清	（東　京）
二〇〇〇円	稲田　素臣	（左　京）
三〇〇〇円	田中　米一	（伏　見）
五〇〇〇円	伊藤督太郎	（下　京）
二〇〇〇円	小笹　良一	（左　京）
二〇〇〇円	松尾　洋	（埼　玉）
二〇〇〇円	安永　武人	（左　京）
五〇〇〇円	吉祥院病院	（南　）
二〇〇〇円	武井　一雄	（左　京）
五〇〇〇円	吉岡　範之	（中　郡）
三〇〇〇円	長島　三郎	（伏　見）
二〇〇〇円	西村　悟郎	（山　科）
二〇〇〇円	田中　ミヨ	（明　石）
二〇〇〇円	岡野　正	（札　幌）
五〇〇〇円	柴田法律事務所	
五〇〇〇円	柴田　慈行	（左　京）
五〇〇〇円	蟹江　邦彦	（東　山）
三〇〇〇円	岡谷　元治	（左　京）
三〇〇〇円	槇　正博	（宇　治）
三〇〇〇円	幸地　伸	（福　井）
三〇〇〇円	清水　定平	（日　向）
三〇〇〇円	一海　知義	（神　戸）
三〇〇〇円	浅井　清信	（左　京）
三〇〇〇円	上野　輝将	（山　科）
五〇〇〇円	京都中央法律事務所	
二〇〇〇円	ヨシトミヤスオ	（左京）
二〇〇〇円	金井　健吉	（東　山）
二〇〇〇円	赤石　茂	（伏　見）
一〇〇〇円	田中　策三	（長　野）
三〇〇〇円	村中　嘉明	（小　松）
二〇〇〇円	重本　健治	（吹　田）
二〇〇〇円	渡辺　照子	（八　尾）
三〇〇〇円	望田　幸男	（向　日）
二〇〇〇円	市木　修	（大　津）
二〇〇〇円	竹永　三男	（上　京）
五〇〇〇円	安東　義男	（長岡京）
二〇〇〇円	有田　光雄	（大山崎）
五〇〇〇円	矢野　恒範	（右　京）
二〇〇〇円	武田　大蔵	（大　阪）
二〇〇〇円	谷村　道雄	（東　京）
三〇〇〇円	持田　幸雄	（向　日）
二〇〇〇円	野口　務	（東　京）
三〇〇〇円	宗川　磯雄	（左　京）
二〇〇〇円	田畑茂二郎	（左　京）
五〇〇〇円	佐藤　春人	（左　京）
二〇〇〇円	大江　洸	（上　京）
五〇〇〇円	加藤　金勝	（東　山）
二〇〇〇円	江口　常平	（東　京）
五〇〇〇円	田中　豊蔵	（　南　）
三〇〇〇円	西垣　正気	（右　京）
四〇〇〇円	有田　正三	（長岡京）
二〇〇〇円	春日　正一	（横　浜）
三〇〇〇円	松本　青洞	（東　山）
二〇〇〇円	北　病　院	（北　）
二〇〇〇円	河音　久子	（長岡京）
三〇〇〇円	岡部　利良	（左　京）
三〇〇〇円	伊藤　晃	（左　京）
三〇〇〇円	青木幸次郎	（南　）
五〇〇〇円	立白　従道	（城　陽）
二〇〇〇円	南谷　新一	（南　）
二〇〇〇円	姫野　純他	（左　京）
三〇〇〇円	石田　真一	（右　京）

以下次号

会費・誌代の払込みをお願いします。

不正常な世相を反映したかのような不順な気候つづきでしたが、皆さんお障りありませんか、ご自愛ください。

三月の総会できまりました本年度の会費、誌代のお払込みを願います。

会費は年額三〇〇〇円（含誌代）

誌代は年額二〇〇〇円（含送料）

昨年は全納して頂いたので、会誌は順調に発行できました。本年も御協力をお願いします。振替用紙を同封します。（御納附済の方はあしからず。）

なお新しい会員、誌友の拡大にご協力を願います。見本誌（旧刊号）御入用の節はお送りします。ご一報ください。（K生）